

---

社会福祉法人あむ  
平成30年度  
事業報告書・決算報告書

---

自 平成30年 4月 1日  
至 平成31年 3月31日

---

社会福祉法人あむ  
理事長 松川 敏道

---



## 全体を通して

平成 30 年度は法人設立 10 年目の節目の年となった。スタッフの人員、予算規模など、すべてが法人設立時の倍以上になったが、ワンマイルネットを中心とした地域とのつながりを大切にする事業や、トップダウンではなくボトムアップで物事を決めていくあむらしい事業運営を心がけて行ってきた。

### 1. 社会福祉法人あむ5か年計画

平成 27 年度に作成した法人の中・長期的計画である社会福祉法人あむ5か年計画の推進を図りそれぞれの計画を押し進めてきた。

#### (1) 法人全体

##### ①第2サポートセンター（SC）構想

第 2 サポートセンタープロジェクトを中心として、具体的なセンターの機能等考えつつ、物件の取得に向けて、土地、建物探しを行ったが、土地の値段等予算、条件面で中々良い物件を見つけることはできなかった。

##### ②重度重複障がい児者への支援

に・こ・ぱで理学療法士を採用した他、ばでい、に・こ・ぱにおいて喀痰吸引研修に参加した。法人内でも喀痰吸引研修の実地指導が行えるよう、法人の看護師が実地指導講師用研修を受講し、重度、重複障がいのある人、子への支援体制を整えた。

##### ③公益的事業・ワンマイルネット事業

ワンマイルネット事業を NPO 法人あむから社会福祉法人あむに移管し、社会福祉法人の地域における公益的な取り組みを行う公益事業として位置づけ、一事業としてチーフを配置した。

人材不足やシフト制の導入により、スタッフがワンマイルネット事業に取り組む時間が限られてきているという課題が明らかになっている。

#### (2) 基礎土台

##### ①給与体系の変更

法人の想いや考え方、今の時代にあった給与体系等を考え、第 2 次給与体系の変更として本俸、各種手当の大幅な改定を行った。

### 2. ワークライフバランスの実現

スタッフの働き方が多様化してきている中、スタッフ全体の仕事と生活の両立を図るため適正な労働時間管理のため、事業所ごとにチーフがシフトの作成及び労働時間管理を行い、適正に超過勤務の管理、手当の支給を行った。

また、就業規則の変更を行い年間での休日日数を定め、月ごとに割り振ることで柔軟な休日の取得、シフト作成を行えるようにした。

### 3.災害対策～大規模災害に備えて

平成 30 年 9 月 6 日に発生した胆振東部地震により、大規模なブラックアウトが起き、大規模災害発生時の緊急対応や非常持ち出し品の準備、参集規定など、まだまだ足りないところが明らかになった。

災害支援検討チーム〈なんきゅうとなり組〉が中心となり研修参加や法人内で議論を行い、規定の検討や緊急時の連絡体制のための SNS の検討、物品購入等を進めた。

## 生活介護事業 びーと

### 1. メンバーの個別支援計画・支援

わたしの計画（個別支援計画）に基づき、活動を組み立て、一人一人にとって充実した支援を心がけた。メンバーの「やってみたい」「〇〇になりたい」想いを、「やってみよう」と向かえるように一緒に考え、自信につながる姿もみられた。今後も支援の質を高め、メンバーにとって次へのステップとなるよう考えていく。

### 2. メンバーの仕事

新たに「ポケットティッシュの袋づめ」と「タオル折り」の仕事が入り、メンバーの得意な力を活かして作業工賃向上へと繋げた。引き続き、メンバーのアセスメントから仕事内容を考え、作業の充実を図っていく。

また、びーすの仕事では、バザーをきっかけに日本精神科看護協会会長から協会で行っている「しごとをつくろうプロジェクト」のお誘いを受け、商品である【てつっぴ（フェルトのマグネット）】を 100 個制作するという新たな取り組みをした。

なお、昨年度の作業収支が大きく上回ったため、メンバーにボーナスとして還元することができた（月平均 3 か月分）。

#### 作業収入

SC 清掃	ポスティング	公園清掃	タオル折	びーす	元気ショップ	合計
357,000	47,470	171,000	1,920	262,410	94,663	934,463

〈円〉

#### 作業支出

作業工賃	ボーナス	材料費他	合計
650,800	158,800	82,381	891,981

〈円〉

### 3. 他事業所とのつながり

余暇活動である「音楽活動」では、アベニュー16さん（就労支援事業所B型）が月1回来訪し、一緒に活動を行った。メンバーもこの交流を楽しみ、お互いにいい影響を受けて良い活動となっている。

今年度も生活介護ネットワーク会議を定期的に行い、各事業所の近況、活動内容や制度のことなどを話題に進めた。9月の後には、各事業所の様子を共有することができ、災害時にネットワークを活かして情報発信し、助け合うこともできることを確認した。

### 4. スタッフ研修

7月に通所を休みにして、スタッフを4グループに分けて他事業所（稲生会・ほっとステーション・つくし・TAK）の見学や体験をおこなった。利用者の個々にそった支援方法や他職種のことを知ることができ、今後に活かしていくヒントが得られた良い研修となった。

また、にこばやばでいと合同で研修を組み、交流しながら学び合えるいい機会となった。

### 5. 事故防止

今年度は、メンバーの道路への飛び出しや転倒による怪我の事故がおこった。これにより個々の特性や身体構造の理解を専門の方から学び、理解を深めた。今後もスタッフのスキルの向上を考え、事故防止に努めていく。

### 6. 勤務時間の整理

余暇活動全体の枠組みを見直し、業務の負担の改善を図った。今後も事業所内で整理できる部分を考えていき、長時間勤務とならないようにしていく。

### 7. 全体を通して

9月の胆振東部地震を通して、事業所内で備えておくべきことや緊急時の連絡手段などをスタッフと振り返りをした。

メンバーが体調を崩してから、短期間で亡くなるという出来事があった。医療機関や看護師との連携をより密にとりながら、日々の体調管理を行っていく。

また母親が急に亡くなり、家族だけで生活を支えていくことが困難になったメンバーがおり、家族以外の社会資源の利用方法や将来のことを家庭と連携し考えていくことの大切さを改めて感じた。

#### 【利用状況】

- ・利用登録者：26名
- ・利用者数月平均：20.1名
- ・平均障害支援区分：4.8

# 児童発達支援・放課後等デイサービス事業 に・こ・ば

## 1. 目的・運営

- 新人、若手のスタッフが増えたことから、療育経験のあるスタッフの助言や外部の研修に参加することで、子どもの育ちのアプローチについての学びを深め、他職種とのやり取りの中から療育知識の向上、スキルアップに努めてきた。
- 年度後半は利用希望児が増えて、定員が満所状態で運営となったため、体制が追い付かず、個別への対応や特性に合わせた取り組みに追われた。

利用希望の問い合わせに答えられず、断らざるを得ない状況になった。また利用児の中には幼稚園を断られる、日数制限がある等行き場のない子が増えてきたことから、それらのニーズに応えるため、休止しているにこば2の再開の必要をスタッフで共有し、その計画準備に入った。
- ガイドライン保護者向け評価表（厚生労働省）では、昨年に引き続き「適切な支援」「療育内容」では「満足している」という評価をいただいた。利用児や保護者の期待に応えられるよう、さらに質の向上に努めていきたい。
- 重症心身障がい児の受け入れについては、理学療法士の採用し、喀痰吸引等の従事者研修、喀痰吸引できる事業所としての登録準備を進めてきた。

## 2. 保護者支援の充実

- 活動の様子について連絡ノートを通し保護者に伝え、保護者からの不安や困りごとに丁寧に文章で回答するよう心掛けた。文章だけで難しい時は電話や家庭訪問や個別懇談を提案し対応してきた。
- ガイドライン保護者向け評価表から、「入口が狭い」「立位保持ができない子のおむつ交換場所は気になるなど」環境整備等の意見があった。

非常時の対応の不明瞭さについては、避難訓練時の様子をブログで公開やしたり、保護者へ緊急時の対応について手紙を再度配布した。

避難場所や災害時の対応の仕方について明確にしてお知らせしたことで、「避難訓練など実施されていて安心して通わせられます」という評価をいただいた。

個別支援計画やプログラムの工夫等では、「とても工夫され、子どもが面白い展開されていると思う親の希望に沿って柔軟に対応いただけています」「保護者でも気づきにくい子供の特徴など、よく見ていただいているとともに、その子に合った支援内容を設定してくれていると思う」という評価をいただいた。
- 利用児の1割がネグレクト・一時保護された経験があり、それらの保護者や子育ての支援が必要な保護者から、子どもに対して「どうしていいかわからない」、「この先どの様になるのかわからない」、「子どもとどう過ごしたらいいかわからない、遊べない」「日常生活習慣へのかかわりが難しい」と訴えてくることが多く、具体的な対応策を伝えることに追われた。

### 3. 個別支援の充実

- ・スタッフ間で日々の療育内容の確認・情報共有・記録の徹底を図り、利用児支援をすることが出来た。
- ・専門性を高め、多方向からの視点で子どもの発達を支援できるよう、初めて理学療法士を採用することができた。
- ・事例検討会議を通し、スタッフが子どもの見立てや特性について学ぶことができ、実践を通して反映することが出来た。

### 4. 連携支援のあり方

- ・幼稚園や保育園・小学校・セラピーとの連携については、保護者を通してやりとりをしながら、個別支援計画に基づいた支援のあり方などを話す機会に恵まれた。小学校、幼稚園から子どもの支援の方向や保護者支援のあり方についての情報共有、相談があり連携を継続していきたい。
- ・虐待、一時保護経験児等の保護者支援は、児童相談所との連携・相談室との連携を密にし、情報共有に努めた。子ども達の安全・安定を図ってきたが、保護者に対しての支援はにこば単独では解決できるものではなく、大きな課題となっている。
- ・看護師・PTとの連携を取りながら、子どもの支援や保護者の要望に応えられるよう努めていく。

### 5. スタッフ育成・研修

- ・中堅スタッフが中心となり、チームとしての関係づくりや支援の在り方、個別課題の提案等充実し、お互いが学びあう体制が少しずつ形になってきた。
- ・事業所内研修では、外部に出た研修を行うことが出来なかったため、次年度は外部研修を実施したい。

### 6. 事故防止

- ・小学生の外出活動中、支援の配慮不足で、子どもが窓ガラスを割り、腕を7針縫う事故を起こしてしまった。(札幌市に事故報告書提出済)なぜ事故が起きたのかフィードバックと再発防止対策について、スタッフ間で確認しあった。
- ・送迎車両が部品劣化で故障が多かったが、事前の点検整備に心がけ、運転時の車両の変化や音については報告することを徹底してきた。
- ・送迎ルートが複数あり複雑なため、時間に追われているとスタッフが注意・緊張を保つことが難しい場合がある。スタッフの負担は大きく、送迎については課題でも多い。

療育スタッフがあまり出入りしなくてもいい体制を作っていきたいと考えているが、体制が取れず、現実には厳しいものがあり、今年度も引き続き検討事項として手立てを検討していきたい。

### 7. 全体を通して

- ・スタッフが子ども達に向かう姿勢と意欲はとても高く、経験の違いや職種の違いがあるが、真摯に取

り組んでいるスタッフの姿勢が子どもたちの成長を支えてきた。これからもチームワークでそれぞれの力を合わせて取り組んでいきたい。また、利用児増・行き場のない子・幼稚園生活に制限がある子・保護者支援が必要な子等の受け入れができるよう、にこば2の早期再開に努めたい。

### 月別利用延べ人数（29年）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
児発	146	137	160	150	164	159	165	157	178	186	179	187
訪デイ	157	152	171	175	139	162	152	142	149	153	148	166
合計	303	286	331	325	303	321	317	299	327	339	327	353

・児発利用 定員 10名 平均 8.2名/日

・放デイ利用 定員 10名 平均 7.1名/日

### 月利用延べ人数（30年）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
児発	165	164	182	172	213	146	222	217	214	217	206	220
放デイ	173	177	190	189	180	134	190	187	167	164	161	170
合計	338	341	372	361	393	280	412	404	381	381	367	390

・児発利用 定員 10名 平均 9.6名/日

・放デイ利用 定員 10名 平均 7.7名/日

## 居宅介護等事業 ばでい

### 事業全体

全体として、スタッフの動きが多い1年であったが、サービスの断りを極力減らしながら引継ぎや研修の受講を行う事ができた。ただ新規の利用相談は、年間で40件超と昨年に引き続き多く、あわせて現在のばでい利用者からもサービス回数を増やしたいという希望が寄せられている。その内の8件については新たなサービス提供につながっているが、新規の利用相談や他のヘルパー事業者や相談事業所との話題の中でも、障がい福祉分野のヘルパー不足をこれまで以上に実感した1年でもあった。

### 1. 事業所内での連携

個別での訪問によるサービスを中心とした業務の性質上、スタッフ全員で顔を合わせる機会が少ないため、月2回設定していた定休日の内、1回を定例ミーティングの日に変更している。また働き方の見直しを行い、超過勤務の解消のため、朝の定時ミーティングを、必要に応じた少人数での打ち合わせに



変更している。そのため全員で揃う機会が以前より減ったが、その分メールやメモでの連絡など、各スタッフが意識的に行う様になってきている。

## 2. 働き方

平日のサービスについては、全体的に夜間帯での利用が増えてきている。変形労働時間制ではあるが、1日あたりの勤務時間が長時間になる日もあるため、休憩時間の取り方の工夫や短時間だけ働けるパートの求人を次年度も継続して行っていく。

## 3. 研修への参加と利用者支援

現在のサービス提供に必要な喀痰吸引等研修や行動援護の研修を順次受講している。また個別で希望があった研修への参加と、下半期は2つの団体で実施された行動援護フォローアップ研修を全員が受講しており、実際に関わっている利用者の事例を通して特性理解や関わりについて学ぶ機会を持つ事ができた。実際のサービスでは引継の機会が多かった事、また身体介助やてんかん発作への対応、外出時の利用者の安全確保等のためにヘルパー2名体制での支援の機会が増えた事もあり、利用者の状態像の把握や各スタッフの関わりについて具体的に振り返る機会が増えてきている。

## 4. ネットワーク作り

さっぽろ行動援護ネットワークに引続き参加、事業所見学会やヘルパー交流座談会、毎月の勉強会に複数のスタッフが出席している。

## 5. その他

- ・行動援護サービスについてはサービス手順書を作成している。
- ・札幌市が行っている障がい福祉分野の人材確保・離職防止の取り組みに、外出のサポートを行う、ガイドヘルパーとして、スタッフ1名がインタビュー協力を行った。

## 共同生活援助事業・短期入所事業 こまち

平成 30 年度はこまち全体の規模を縮小し限られた部屋数の中で、短期入所のニーズに応えながら運営してきた1年であった。

9月の地震発生と同時に入居していた女性が病気で亡くなり、ホーム全体に悲しみや動揺もあったが、スタッフも利用者もいっしょにいることの安心感も体験し、入居者と一緒に災害対策や避難訓練の実施方法について考える機会をもって各自が自分の問題として捉える視点を得ることができた年であった。

くらし支援をともに考えるためにばでいと事務所を共有する計画は、会議や事例検討などの研修の場を共有することに代えて、今後継続する。

## 1. 規模の縮小と定員減

昨年度当初に、4階の女性のホームを閉鎖し、ハピネス6名、てらす4名（男性6、女性4名）と短期入所2名 計12名定員となった。

ハピネス開設に伴い消防法上、4階までのすべての住宅に有線の火災報知機を設置する義務がオーナー側に発生することになり現実的に難しいと判断したこと、女性入居者の退居が複数出たことが背景となり、縮小するタイミングとしてはこの時期が適当と判断したものである。

## 2. 夜勤スタッフの確保とスタッフ体制

女性スタッフは平日・週末を問わず夜勤可能な当直に入ることが可能な方が2名加わり、常勤スタッフ2名はほぼ夜勤に入らず交代で日勤ができるようになった。一方男性スタッフは、6月に常勤スタッフ1名が退職したのちは常勤1名となり、夕方の日勤や当直体制がとれず、他の事業所からの応援に頼ることが年度末まで続いている。夜勤スタッフの確保が急務である。

世話人は、3名体制でシフトを組んでおり、年末年始も含め安定的に給食提供ができています。朝食は配食サービスを継続利用し、スタッフの調理負担を軽減することができ、9月の地震直後も休まず届けていただき大変助けられた。

## 3. 利用者の次のステージを考える

入居者ひとりひとりの希望や、今後の展望などを一緒に考えながら支援を続けている。一人暮らしを望まれる場合には、情報提供や具体的な手立てを引き続き入居者とともに考えたい。

こまちへの入居待機者も複数おり、短期入所事業を利用していただきながら家庭状況や本人の状況を考慮して、次の入居受入体制の検討中である。

## 4. 短期入所事業

重度心身障害者の方にも短期入所サービスを提供できる環境になり、月に2～4日ではあるが、アルバイトスタッフと常勤スタッフとでケアに入りながら継続利用につながっている。引き続き、受け入れに取り組んでいきたい。

短期入所利用実績

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	31.1	2月	3月	合計
人数	5	8	5	5	8	9	7	11	10	6	7	7	88
日数	26	40	38	27	28	49	38	51	37	32	33	34	395

9月の胆振東部地震で被害を受け、居住していたマンションから避難所に避難していた車いすの女性と小学生の男児が避難所閉鎖に伴って、マンションエレベーターの修理が済むまでの約2週間、短期入所を利用した。

同時期に女性入居者が亡くなられ、空き室を 11 月まで短期入所事業で使用したため、のべ利用者が増加している。他にも同居家族の病気や入院などの理由で 1 ヶ月レベルの長期利用者、家族のレスパイト目的で継続的な利用者があることが特徴的である。

## 5. 利用者の健康と安全

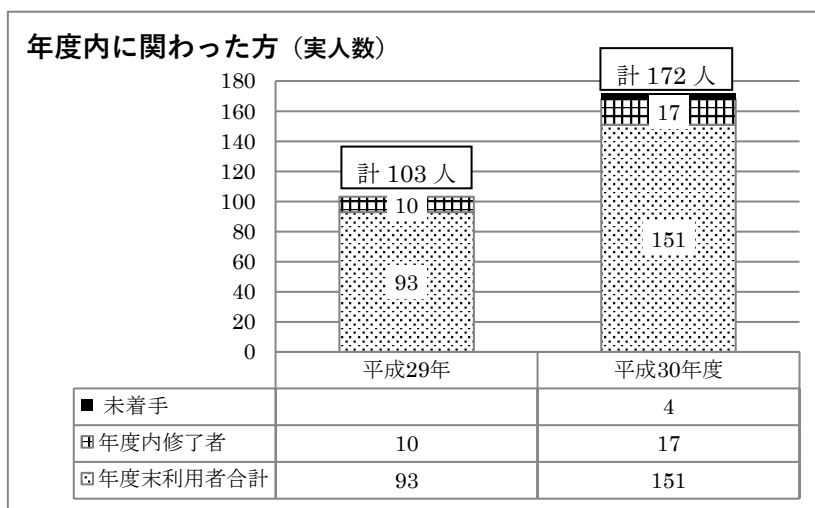
短期入所利用者の服薬管理を誤り、大量服薬事故を起こしてしまった。重大なミスの反省を踏まえて今一度、利用者の健康と安全を守る基本に立ち返り、気を引き締めて支援に取り組みたい。

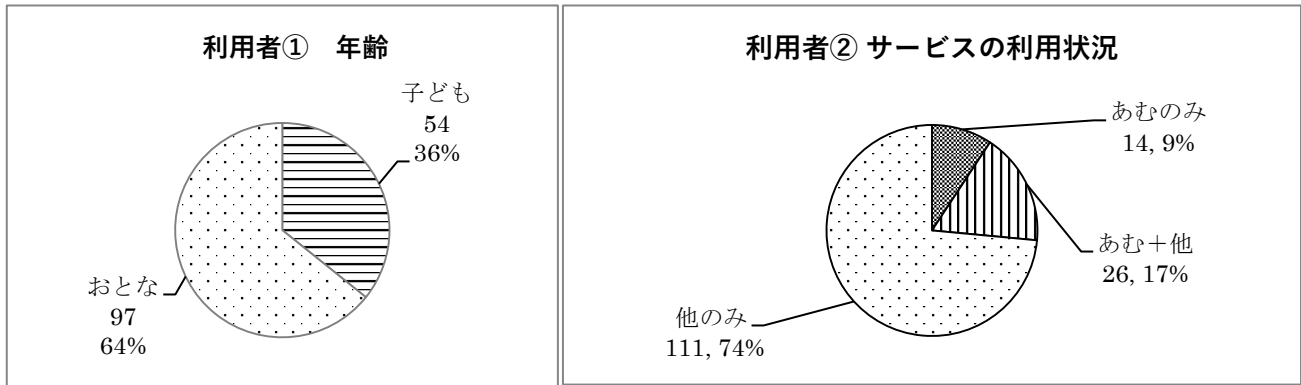
# 指定特定・一般・障害児相談支援事業 相談室につと

開設4年目を迎えた。相談依頼件数は年間を通して増加し、新規受け入れは徐々に頭打ちになってきた。関係機関との関係も少しずつ広がり、行政機関では中央区福祉支援係、保健支援係との一定の信頼関係を築けてきたほか、ヘルパー事業所、児童発達支援事業所、グループホーム、医療機関等の一定数とも信頼関係を築けてきた。また、同じ指定相談支援事業との交流も深まり、スタッフの支えになってきた。

## 1. 計画相談支援の実績

年齢、障がい等に関わりなく幅広く相談を受け付けてきた。計画作成を含めた行政的手続きは比較的問題なく進めることはできたが、受け入れ事業所（特にヘルパー事業）の少なさから新規にサービスを導入することが非常に困難だった。その点では、利用者のニーズを満たすことが難しかったといえる。





## 2.災害支援

平成 30 年 9 月 6 日の胆振東部地震の際、近隣の避難所を回ったほか、区役所からの要請で車椅子女性とその子ども支援に臨時的に対応した。一方で、利用者の中の一人暮らしの方や医療機器が必要な方などへの安否確認などは不十分で課題を残した。

## 3.ミーティング・研修

兼務スタッフの勤務の関係もあり定期的に関することはできなかったが、週 1 回～2 回程度、1 回 1 時間半～2 時間程度のミーティングを実施してきた。担当する利用者の情報と制度活用および相談の進捗状況の共有、支援策検討を中心とした学びあいの場として機能してきた。

また法人内の他の相談支援事業所（相談室ぽぽ、ワンオール）と共に情報共有、事例検討等のための場「多岐 co 実」に参加した他、相談支援事業所と中央区の勉強会、「指定相談の集い」、事例検討等の研修に参加した。

## 4. その他

「札幌市障がい児等療育支援事業」のパンフレットを作り直し、法人としての窓口及び一実施事業所として活動してきた。障害福祉サービスや相談支援では手が届きづらい定期的な訪問による療育や電話による援助などを実施してきた。市と確認の上、発達障がいのあるおとなの支援にも継続的に支援してきた。

○訪問療育：のべ 53 件

○外来療育：のべ 6 件

○機関支援：のべ 7 件

# 相談支援事業 相談室ぽぽ

## 1.年間利用実績

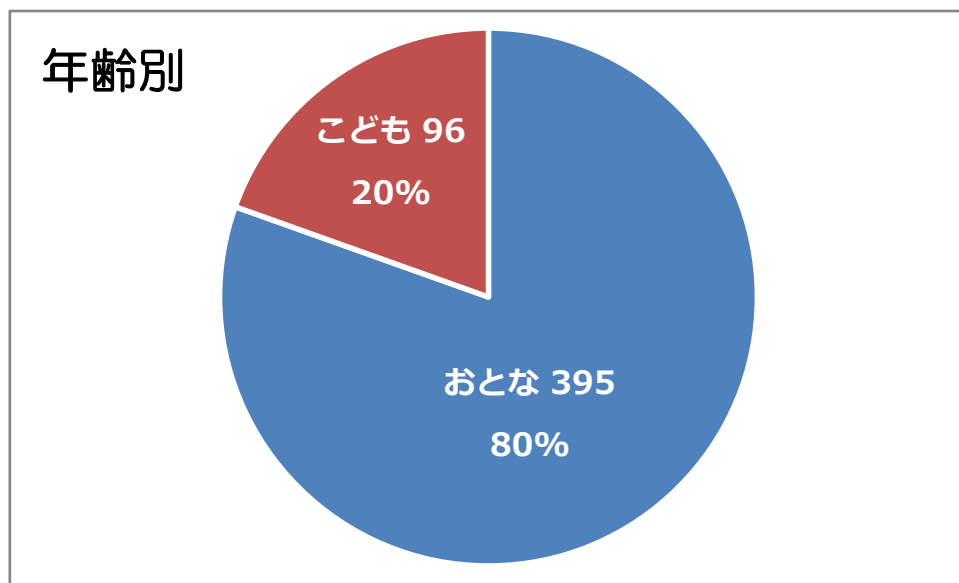
○2018年度登録者数 491名（2017年度：459名）

○2018年度新規登録 118名（2017年度：126名）

### ◆居住地◆

中央	北	東	白石	厚別	豊平	清田	南	西	手稲	市外	計
451	5	4	8	2	6	0	4	8	1	2	491

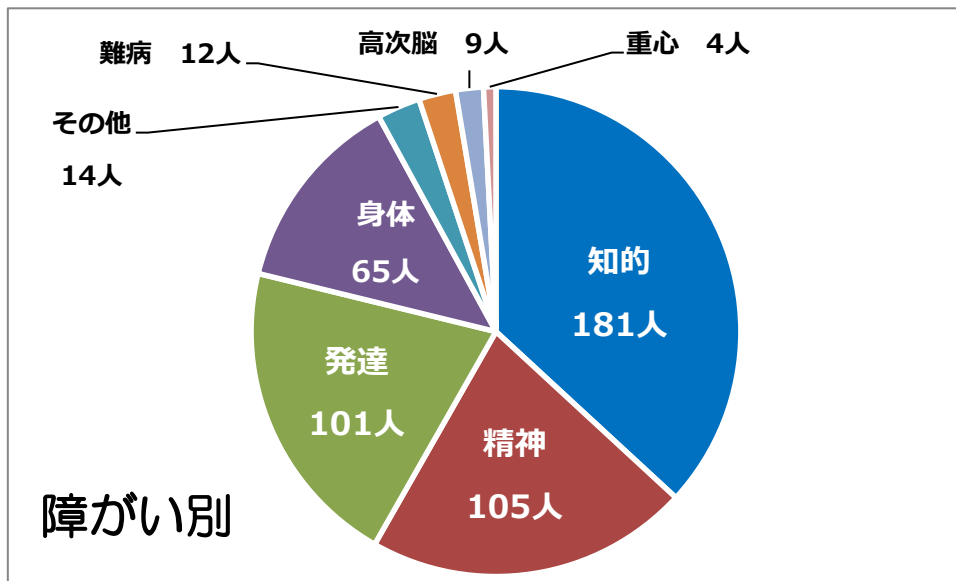
### ◆年齢◆



### ◆相談内訳◆（2017年度:4698件）

訪問	来談	同行	電話	メール	ケア会議	機関	その他	計
714	351	212	1822	124	184	1675	8	5090

## ◆障がい種別◆



## 2.委託相談支援事業と指定相談支援事業の連携

昨年度の要綱改正（札幌市障がい者相談支援事業実施要綱の改正）に伴い、指定相談支援事業所はサービス等利用計画を中心に相談支援を行い、委託相談支援事業所はサービス等利用計画以外の幅広い相談支援を中心に行う事を札幌市、区、相談支援事業所と確認をしてきた。相談者にとって利用しやすい相談支援事業所を目指すためにも、今後も指定相談支援事業所と委託相談支援事業所の連携の在り方を検討する必要があると感じている。

次年度はエリア（中央、西、手稲）の相談支援事業所に呼びかけ「エリアで考えられる相談支援事業所の連携」を検討する機会を持ち、指定相談支援事業所と委託相談支援事業所の連携の在り方を検討する他、相談支援事業所の対応についても可能な限りで統一できる事を目指す。

## 3.ピアサポーター

昨年度と変わらず知的障がいの方4名、視覚障害の方1名の体制でピアサポーター交流会等に参加してきた。今年度は精神的・身体的不調により活動に制限のかかるピアサポーターがいたが、次年度以降は積極的に参加をしたい意思は確認できているため、今後も継続していきたい。

ピアサポーターの個別の活動としては、前年度から引き続いて研修講師としても依頼を受け、数多く活動を行ってきた。個別相談に関しては、件数は少ないものの他区の配置事業所からの紹介で病院へ出向いて相談を行うなど、活動の幅は広がってきているように感じられる。

少しずつピアサポーターの周知も図り、活用してもらえるように努める。

## 4.地域資源との関係、地域での役割発揮

身近な地域にある下記のような機関と繋がりを作り関係を計る。このような中で、相談員個々が様々なことを学ぶと同時に相談支援事業等に寄与することができた。

#### ①中央区合同勉強会

相談支援に関わる情報共有、考え方の整理、委託と指定の連携、計画相談の検証等を目的に実施。区役所保健福祉課、委託相談事業所、指定相談支援事業所等で構成。

#### ②札幌市自立支援協議会

- ・中央区地域部会（事務局）
- ・相談支援部会（定例会参加、企画推進等プロジェクトチームへの参加）

#### ③外部講師の派遣等

- ・北海道相談支援従事者研修
- ・北海道サービス管理責任者研修 など

#### ④その他

- ・相談員同士の各種のネットワーク（事務局等） など

### 5.相談支援スキルの向上

日常業務の中でのスキルの向上等をめざし、次のような取り組みを実施。

#### ①スタートガイドブックの作成

- ・スタッフがスムーズに業務を行う上での指針を作成

#### ②個人のテーマを設定し知識、技術の向上に努める

- ・成果については年度末に相談室内で発表・共有

#### ③日常業務の中でのスキル向上

##### （1）随時のミーティング（毎朝、及び随時必要に応じて）

個別相談の経過報告、事例の検討、記録の作成、スタッフの行動予定

##### （2）定例ミーティング（原則毎週水曜日、午前中）

個別相談の経過報告、事例の検討、記録の作成

##### （3）月末ミーティング（原則毎月最終金曜日、午前中）

会議、研修報告、スタッフ個々人の相談活動の振り返り、記録の作成

##### （4）スペシャル・ミーティング（年に2回）

個別相談の継続、待機、終了の判断やそれらの目途をつける

##### （5）ほぼ、にっとの合同ミーティング（2ヶ月に1回）

事例検討（事例提供、進行、板書を順番に行う）を通して技術の向上を図る

#### ④札幌市自立支援協議会全体会への参加

- ・開催時に参加

# さっぽろ地域づくりネットワーク ワン・オール

## 1.個別相談支援業務

6月28日開催の相談支援部会定例会で整理し共有した『ワン・オールの個別相談の取扱いについて』の共有内容に沿って実行した。

登録者数は、11名（H29：13）。登録も登録以外も市外からの転入ケースが多く47件となっている。8名が札幌弁護士会からの退院請求ケースとなっている。登録者への支援回数は延べ220回（H29：149）。なお、未登録者への支援回数は延べ270回（H29：179）。登録者と未登録者への支援件数を合わせるとほぼ前年度と同様。

## 2.委託相談支援事業の支援業務

### （1）相談支援事業の後方支援

5月29日に「平成30年新任スタッフ研修」として、札幌市障害福祉課、ワン・オール、自立支援協議会会長（北星学園大学社会福祉学部教授）永井順子氏の講演を行った。

札幌市とワン・オールからは相談支援や協議会について、永井氏からは「ソーシャルワークの理念と障がい者への相談支援」という内容であった。（参加者18名）

9月21日には「人材育成」と「スキルアップ」研修として木村晃子氏（ワークスペースあおいそら代表）による「家族を理解する～家族システムから学ぶ相談支援の視点」という講演と演習を行った。グループワークも行い、参加者からも好評だった。（参加者36名）

札幌弁護士会とワン・オールとおがる共催研修を30年度は2回開催。1回目は、「出口支援のいろいろ」。2回目は、「医療観察法を学ぶ」。いずれも札幌保護観察所に登壇、参加もしていただく。参加者数は、第1回が36名、第2回が43名だった。

### （2）「基幹相談支援センター運営業務」のあり方検討

今後の基幹相談支援センターのあり方検討のため、19の委託相談支援事業所に訪問調査を依頼。10月から11月にかけて、訪問調査を実施した。訪問調査は、①事業所体制（人材の確保と育成等）、②相談支援業務について（相談が受けづらいケース等）、③札幌市の相談支援体制整備（現状と課題等）、④地域づくり（協議会でワン・オール（事務局）が担う役割等）の大きくは4項目についてご意見をいただいた。訪問調査で頂いたご意見については今後、相談支援部会で報告と提案を行い、次年度の当所の事業計画に反映させていきたい。

政令指定都市基幹相談支援センター調査についても、実施。政令指定都市基幹相談支援センター調査は、国が示す基幹相談支援センターの役割イメージ（総合相談・専門相談、地域移行・地域定着、権利擁護・虐待防止、地域の相談支援体制の強化の取組）や、札幌市障がい者相談支援事業実施要綱に定める基幹相談支援センター運営業務の内容（委託相談支援事業の支援業務、計画相談支援と障害児相談支援の推進業務、地域相談支援の推進業務、障がい当事者による相談支援活動の支援業務、協議会事務局業務、その他）に沿って、政令指定都市の基幹相談支援センターの業務実施状況を把握する。政令指定



都市基幹相談支援センター調査も、次年度以降の当所の事業計画に参考にしていきたい。

仙台市が基幹相談支援センター設置についての検討を行っているとのことで、仙台市障害者支援課からの視察対応を、札幌市障がい福祉課と共に行った。

### 3.計画相談支援の推進業務

「計画相談支援 How to 研修」を、今年度は年に4回（10月、11月、1月、2月）実施。13時半～17時の3時間半の研修で、100分ずつの2部構成にした。「障害福祉サービスと関連制度についての学習と計画相談支援の Q&A と申請から請求までの実務の流れ」となっていて学習範囲が広い。今年度アンケートを実施し、次年度の研修に活かす予定。

### 4.地域相談支援の推進業務

主に、札幌市精神障がい者地域生活移行支援事業のピア活用業務を通し、地域移行を推進している。本事業はピアサポーターを活用しなければならないため、人材確保が重要である。29年度から、ピアサポーター配置事業所にも関心を持ってもらうための発信をしてきた。その成果もあり、相談室ぼらりす、相談支援事業所ノックから協力（兼務）いただき、2名増員し、現在4名のピアサポーターが活動している（相談支援事業所ノック2・相談室あさかげ1・相談室ぼらりす1）。

地域移行（退院）の実績は、30年度は3名（29年度は2名）。地域定着や現在ピアサポーター派遣中の地域移行対象者を含めると7名となっている（29年度は5名）。ピアサポーターは週3日勤務しているが、1名の利用者に2名のピアサポーターの対応が標準になっている。

### 5.障がい当事者による相談支援活動の支援業務

ピアサポーター配置事業所意見交換会（計7回実施）は、今年度、障がい福祉課よりピアサポーター配置業務について、1事業所当たりのピアサポーターの勤務時間を合計で週29時間以上とする中期目標が示された。上記目標について共有し、ピアサポーターの具体的な活動の推進について議論した。「仕事を作りあう」という観点から事業所間で連携し情報を伝えあい、ピアサポーター活動の充実を図った。また、雇用契約、就労系福祉サービスを利用しているピアサポーターについて、今後のありかたについても議論した。

月1回のピアサポーター交流会を通してピアサポーターの現状の活動や悩みを共有し、互いに学びあう姿勢で活動できた。

### 6.札幌市自立支援協議会の事務局業務

（1）協議会（全体会、運営会議、各プロジェクトチーム）事務局業務

事務局として、全体会2回、運営会議11回、各プロジェクトチーム会議計41回の会議開催の準備等に関わっており、障がい福祉課との共同により資料準備、記録作成等を行っている。平成30年度第1回全体会において、教育・難病・高齢分野から新たな委員が選出されることについて承認。第2回全体会から就任している。「さっぽろ障がい者プラン」に関しては、平成30年度第2回全体会にて平成29

年度実績が報告されている。

地域課題に関わる動きとして、運営会議において「移動に関する課題」に関わる課題について今後の動きを検討。ワーキングチームを結成し、新たなプロジェクトチームの設置へ向けて動いており、事務局としてワン・オールも関わっている。また、運営会議においては、求めに応じて、当所の活動状況報告を行い、内容や構成員が類似する会議の状況把握を行った。

協議会全体では、行政との意見交換開催状況共有等については、各区の状況に合わせて今後は開催していくということで合意。また、9月に発生した北海道胆振東部地震について状況整理や今後の取組みについての共有を第32回全体会で行っていく動きをとっている。

身体障がい者・知的障がい者地域生活移行推進PJが今年度5月に設置。地域生活支援拠点整備についての検討のため、2か月に1回程度の頻度で開催された。それぞれのPJ、運営会議において、終結時期を見据えた活動を実施している。

## (2) 相談支援部会事務局業務

前年度同様、事務局会議（定例会とその準備のための事務局会議）、エリア会議（事務局会議で整理された議題を協議する場、4つのエリアに分けた会議体）、定例会（全体の報告、承認の場）で構成され、会議を月に1回実施している。事務局として札幌市障がい福祉課と協同しながら事務局会議の進行、記録、定例会の記録を担い、構成員間での記録の共有や、会議進行にあたる準備を行った。

定例会ではワン・オールの報告を実施。「課題調べシート」については、9件の提出があり、主に定例会内でその制度や実態、相談支援事業所の対応方法について共有を行っている。相談支援部会のプロジェクトでは、企画推進室が14回（内研修3回）、地域支援員会議が6回開催。地域支援員会議では全事業所共通のパンフレットを作成し、活動の普及啓発に取り組んだ。

## (3) 各区地域部会

各地域部会へは、地域部会連絡会も含め、今年度現在まで、計98回の会議に参加している。地域部会への参加の仕方は、年度当初の地域部会連絡会の際に確認した。確認した内容については、地域課題や部会活動などの把握と、他の地域部会や札幌市の動向などについて情報提供等のために、主に各区地域部会の運営に関わる会議への参加とした。あわせて、ワン・オールブログへの掲載を含む広報活動のためにも各区地域部会へ参加することとした。

東区と白石区、豊平区、西区地域部会においては、部会からの研修依頼で講師対応の協力も行った。

地域部会見える化の取組として、地域部会運営ステータスや構成員名簿、活動内容の公表（開催案内等）のワン・オールかべ新聞への掲載を行った。活動内容の掲載については、事前に各区地域部会と、掲載手順についての確認を行った。

## (4) 専門部会（相談支援部会を除く）

子ども部会は部会、事務局会議、全体研修会に参加している。全体研修会はワンオールブログの取材も兼ねて参加した。就労支援推進部会については、今年度はまだ参加できていないが、調整をしていきながら参加していきたい。

専門部会連絡会については、運営会議から専門部会連絡会で検討する事項もあるため、今年度はオブザーバー的な参加よりも事務局的な関わりの方が強くなっている。障がい福祉課との共同により資料準

備、記録作成等を行っている。

また、三専門部会の横のつながりを強化する活動、未整理の地域課題の改めでの整理、次期さっぽろ障がい者プラン見直しアクションについての素案検討や研修プロジェクトチームの引き継ぎ等、専門部会連絡会で検討していくべき案件は多種多様であり、スムーズな会議運営が行われていくように、今後の事務局の役割について専門部会連絡会と相談していきたい。

## 7. 地域支援体制の構築

### (1) 「誰もが住みやすいあんしんのまちコーディネート業務」の推進と周知活動

北海道胆振東部地震では障がい当事者、福祉関係者、地域、それぞれが「日頃の備え」の大切さを痛感した。札幌市と共催実施した「支え合い研修」においては多くの町内会、福祉関係者が参加。(約430名)災害避難に関する関心の高さを感じた。

町内会への支援は避難行動要支援者名簿情報提供時の同席(7町内会)、講演活動(5件)、・避難訓練企画(1件・継続中)を実施した。各区活動推進担当係長、地域支援員と連携して行っている。今年度より福祉事業所、障がい当事者に対する支援も行っているが、福祉事業所2件、家族会2件、行政1件の依頼があり、講演を実施した。

### (2) 市内関係機関との連携

機関類型別の支援件数は、司法が62件(H29:117)、専門機関(公設・民間)が57件(H29:58)、行政が58件(H29:85)、医療機関が31件(H29:31)、障害福祉サービスが25件(H29:57)など。これら以外にその他が39(H29:6)、市外が90件(H29:125)となった。

### (3) 生活圏域での連携

夢民が主催する、「相談支援ネットワーク会議」へ3回参加。また、振興局と札幌市障がい福祉課も加わった意見交換会に参加。北海道自立支援協議会では、地域づくりコーディネーター部会に参加。

### (4) 研修支援、人材育成支援

相談支援従事者研修の他、札幌市社会福祉協議会や学校、児童相談所、家族会からの講師依頼対応や研修企画強力。依頼元機関の対象範囲が区域を越える機関からの依頼があり、依頼元機関の対象範囲が区域の場合は、最寄の委託相談支援事業所等に依頼がされていることが想定される。

## 8. 情報提供、情報発信

### (1) ワン・オール・プレス<機関紙>

ワン・オールプレスについて、今年度は年1回発行し、札幌市社会福祉協議会様にご寄稿頂いた(市民後見推進事業について)

次年度はワン・オールで担っている業務や関係機関に対して特に情報共有を行いたい事項について内容を協議し発行していく。

### (2) ワン・オールかべ新聞<ホームページ>

ワン・オールかべ新聞について、年度当初は、制度改正や報酬改訂等に伴う、厚生労働省や札幌市の

資料とホームページリンク先等の掲載を意識的に行った。北海道胆振東部地震後は、生活支援ガイド（札幌市ホームページ）のリンクを掲載した。協議会の情報についても随時掲載している。

今年度のアクセス件数は、「ワン・オールかべ新聞」が31032件（H29：31110）、1日平均約85件（H29：85件）。「ワン・オールブログ」が3929件（H29：3894件）、1日平均約11件（H29：11件）。

## 9. 運営体制

スタッフについて、2法人からの派遣をいただき、年度当初は常勤換算4.9名体制で開始し、その後、産前・産後・育児休業により4.5名体制となる。ピアサポーターについては今年度2名増員し4名体制とした。

ミーティングについては、報告事項の共有や、協議のため、ミーティングを35回開催した他、今年度から、協議会担当者によるミーティングも開催し、担当者間で協議会の状況共有を行いながら、協議会の各組織への参加を行っている。

運営委員会については、6月と2月に開催し、今年度の事業計画や事業報告にご意見を頂いた。

## 地域ぬくもりサポート事業

地域ぬくもりサポート事業は、障がいのある人や発達に心配のある子の日常生活を地域全体でサポートしていくため、地域住民（地域サポーター）による有償のボランティア活動を推進する札幌市の事業である。

当法人が札幌市より運営委託を受け、地域ぬくもりサポートセンターとして、手助けを求める方と、誰かの役に立ちたいという思いを持った地域サポーターをつなぐ役割を担い、活動を展開している。

「地域に暮らす人同士、お互い対等な人間関係のもとで築かれる助け合いの輪を広げていきたい」というこの事業の趣旨は当法人のミッションである「出会いからつながりを編み、結び目を作る」と理念が合致しており、ミッションを体現する事業と言える。

月別支援件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
あむ	41	50	44	39	32	32	37	36	62	61	65	63	561
あむ以外	36	62	48	52	44	43	59	54	72	53	75	58	656
合計	77	112	92	91	76	75	96	90	134	114	140	121	1217

支援内容内訳

支援内容	あむ	あむ以外	合計
外出支援	259	24	283
育児支援	45	319	364
家事援助	162	207	369
見守り・話し相手	56	3	59
庭仕事・除雪	1	27	28
活動支援	10	58	68
コミュニケーション支援	28	1	29
その他	0	17	17
合計	561	656	1217

サポートセンター担当区別支援実績

サポートセンター	担当区	件数
あむ	中央区	497
	南区	2
	豊平区	62
	清田区	0
HOP	西区	330
	北区	60
	手稲区	14
わーかーびい	東区	42
	白石区	163
	厚別区	47
合計		1217

地域サポーター年齢層・男女比（あむ）

	男	女	合計
10代	1	1	2
20代	15	19	34
30代	19	15	34
40代	18	24	42
50代	5	18	23
60代	16	26	42
70代	7	18	25
80代	0	3	3
合計	81	124	205
平均年齢	45.2	50.4	47.8

利用者年齢層・男女比（あむ）

	男	女	合計
10歳未満	18	1	19
10代	13	6	19
20代	7	4	11
30代	4	16	20
40代	11	23	34
50代	5	27	32
60代	9	13	22
70代	3	10	13
80代	3	8	11
90代	1	6	7
合計	74	114	188
平均年齢	33.8	52.8	43.3

地域サポーター職業別・男女比（あむ）

	男	女	合計
会社員	30	20	50
アルバイト	8	18	26
主婦・主夫	1	42	43
学生	12	16	28
自営業	6	3	9
無職	24	25	49
合計	81	124	205

利用者障がい種別・男女比（あむ）

	男	女	合計
知的	7	2	9
発達	29	13	42
精神	10	35	45
視覚	1	15	16
肢体	18	42	60
難病	5	4	9
重症心身	1	0	1
重複	3	3	6
合計	74	114	188

2017年度から始まった札幌市内イオン各店舗におけるPRイベントは2018年度5回開催し(元気ショップと共同開催2回、単独開催3回、各回2日間ずつ)地域サポーター募集の呼びかけを行った。

予め広報さっぽろにイベント開催の告知を掲載されたことで、サポーター登録希望者が来店し、登録につながり、また当日このイベントでぬくもりサポート事業のことを知った来店者が登録してくれたことで、地域サポーター登録者を23名増やすことができた。

地域の役に立ちたいという思いを持つサポーターの力を生かすことで、地域に住む障がいをもつ人、子の新たなニーズを発掘し、障がい者支援の知識や経験等を持たない人による支援、障がい福祉サービスの枠組みによらない支援の可能性を広げることができた。

課題としては活動地域の偏在が大きく、中央区以外の地域（特に南区、清田区）における活動件数が伸び悩んでいる。理由としては南区、清田区はサポーター数が少なく、また活動エリアが広いため、近隣に利用者、サポーターが居住していることが少なく、移動に公共交通機関を使わざるを得ないことからマッチングが難しいことが挙げられる。

一人でも多くの利用者からの依頼に応えられるよう、地域サポーターを増やすため、引き続き事業のPR活動に努めていきたい。

・PR活動

イオンPRイベント（元町店、麻生店、琴似店、西岡店、新さっぽろ店）

広報さっぽろ 6月、8月、10月12月号にイオンイベント開催告知記事掲載

STVラジオ さっぽろ散歩 10月20日（土）放送

区役所、まちづくりセンター等公共施設、地下鉄駅構内等ポスター掲示、チラシ配布

札幌市ホームページ、Yahoo!ボランティア 情報掲載

地域サポーターを対象とした研修会はこれまで1年度1回の開催であったが、地域サポーターからの

研修機会をもって増やしてほしいとの要望に応え、初めて2回開催することができた。

研修内容は前半、障がいについて理解を深めるための講義、後半は地域サポーター交流会という2部構成で開催し、後半の地域サポーター交流会においては普段一人で活動している地域サポーター同士がお互いの活動を紹介し、交流を深めることができた。

- ・地域サポーター研修会

第1回 10月10日(水) 14:00~16:20

「知的・発達障がいのある子の暮らしを支えるために」

第1部 講演『知的・発達障がいのある児童の理解と関わり方』

札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる主任 坂井 翔一氏

第2部 地域サポーター交流会

第2回 3月20日(水) 14:00~16:30

第1部 シンポジウム『障がいがあったって人生イロイロ!』

市内相談支援事業所に所属するピアサポーター4名より自分の障がい、暮らしの様子などについて話を聞く

第2部 地域サポーター交流会

※会場はいずれも札幌市視聴覚障がい者情報センター1階研修室

**広報** ami.com

## 全体として

継続課題である、広報誌の作業工程の見直しと作業の効率化、ホームページのリニューアルなどに取り組んだ。平成30年度は主にホームページのリニューアルを中心に進めていった。

### (1) わんまいる・みゅ〜じあむ

平成30年度は発行せず〈わんまいる・みゅ〜じあむ〉のあり方について検討し、ホームページリニューアルを優先し出来上がりの目途が出来てから進めていくこととした。

紙媒体を通してしか活動を知らない人への広報手段としての〈わんまいる・みゅ〜じあむ〉の必要性、発行部数の検討などをし、今後の方針を決定していきたい。

### (2) ホーム・ページ

法人ホームページのリニューアルを継続し、サイトの内容、デザインを検討してきた。ホームページ作成を依頼する業者を決め、全体の輪郭はほぼ完成し、今後、各事業所への掲載する文章、写真等の変更点を確認して2019年度の夏頃に完成予定である。

## 実習受け入れ

社会福祉士、保育士、作業療法士を目指す大学生、専門学校生の実習を受け入れた。

サブチーフを中心として実習受け入れ委員会を組織し、実習スケジュール、事業所間の連絡調整、実習生への指導、助言、養成校との連絡調整等を行った。

法人、事業についての理解を深めてもらうためのオリエンテーション、実習生が分からなかったこと、困ったことなどの疑問点、悩みを解消するためのフィードバック、スーパーバイズ等を通して、実習指導者自身が自分たちの仕事を振り返り、指導力、伝える力を身につける機会になっている。

平成30年度は職業体験「リサーチ型企業研修」として、市立札幌開成中等教育学校中学3年生2名を受け入れた。福祉現場の面白さややりがいや若い世代に伝えていくことも法人の役割であり、今後も積極的に若い世代の実習受入を進めていきたい。

### 実習受け入れ委員会

- ・責任者：社会福祉士実習指導者（法人事務局：姉帯）
- ・実習担当者：各事業所のサブチーフもしくはそれに代わる者
- ・社会福祉士実習指導者：4名（平成30年3月現在）

### 実習受入実績

- ・社会福祉士実習 23日間 北海道福祉大学校社会福祉学科3年生:1名
  - ・社会福祉士実習 23日間 日本福祉大学通信教育部3年生:1名
  - ・社会福祉士実習 23日間 札幌医学技術福祉歯科専門学校通信課程3年生:1名
  - ・保育士実習 10日間 こども学舎2年生:1名
  - ・地域作業療法演習 2日間 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科3年:2名
  - ・学外体験実習 5日間 北星学園短大生活福祉ゼミ:4名
  - ・職業体験 5日間 市立札幌開成中等教育学校中学3年生:2名
- 計91日間 12名

## スタッフ研修 SAT

### 全体を通して

9月の北海道胆振東部地震の影響で、スケジュールの変更などはあったが、全体的に年度当初に予定していた内容の研修は開催し、外部講師やSAT担当以外のスタッフの協力もあり、スムーズな研修運営ができていた。

今後も、継続するべきものは継続しつつ、実施方法や情報提供の方法など見直しが必要な点を検討し、



スタッフ全体のスキルアップを図るための研修企画を実施していきたい。

## 1. 研修について

基本的な知識の獲得は、各スタッフが自主的に行い、SAT では専門的な知識・技術の習得を図るため、以下のような研修を行った。

5月 ディナーミーティング

10月 実践交流会①

11月 虐待防止研修

①基礎編 ～「虐待防止法出前講座」

札幌市障がい福祉課個別支援主査 鈴木 亨氏

②深める編～「障害者虐待防止」～SHELL 分析で考える

かみかわ相談支援センターねっと 安井 博子氏

1月 実践交流会②と野中式事例検討を学ぶ

※9月に予定していた野中式事例検討研修を1月に開催。

2月 「利用者の見立てと家族支援」

足寄町役場福祉課参事 子どもセンター長 佐々木 浩治氏

3月 海外研修報告 アメリカの「本人中心支援」に基づく障害者の「自己選択・決定」を保障するための支援について

相談室ほぼ 登り口 倫子相談員

- ・実践交流会は、第1回目を午前中から開催した。一日開催したことで、昼食時に交流が図れたり、普段最後まで出席出来ないスタッフが出席できた。また終了後に各事業所に振り返り SC 新聞を作成してもらい、次の回に張り出すという工夫を試みた。
- ・今年度も外部講師に協力いただくことができた。また、他法人にも声をかけ、一緒に学ぶ機会を得ることができた。
- ・玉突き研修は、エントリーや日程がなかなか合わず、年度内実施が困難な状況があった。実施方法や研修の意義等について改めて全体に意見を聞いて検討する必要がある。

## 2. 研修情報の共有について

- ・研修情報についてはメールでスタッフに周知した。今後もメールでの研修案内を行ってきたい。

## 3. ディナーミーティングについて

- ・あむの年表を見ながら、大久保と和久井から法人の歴史を聞く事により、法人の成り立ち、大切にしていることを参加者全体で話すことができた。参加できないスタッフもおり、今後も継続して、歴史や理念を共有していくための研修を開催していきたい。

#### 4. 虐待防止研修、事例検討会について

- ・虐待防止については基礎編・深める編共に法人全体で学ぶべき内容であり、継続的に毎年行っていくことが必要である。

事例検討については今回改めて野中式事例検討について学ぶ機会を持つことが出来た。アンケートに「時間が足りなかった」という意見もあったため、今後はもう少し時間をとって開催できるように検討していきたい。

## ワンマイルネット事業

### 1. ワンマイルネット事務局

ワンマイルネット事務局は賛助会員管理の他、イベント情報の発信や問い合わせに対する連絡窓口としての役割を担っている。

また幌西第 12 分区町内会班長業務（回覧板の管理・町内会費集金等）や西屯田南 8 条商工会会員として、総会、行事への参加、情報交換等を行った。

### 2. まちづくり事業

#### 《なんきゅう夏祭り》

日時 7月29日（日）11時～15時00分

会場 わんぱく公園、南 9 条通サポートセンター

町内会、商工会役員、法人評議員にも協力いただき実行委員会を組織し企画・運営を行った。

パフォーマーによるステージや南 8 条商工会との共同遊びブース、屋台、縁日、バザーの出店の他、北海道文教大学、就労継続 B 型事業所エールアライブ、稲生会、札幌この実会など日ごろから関係のある団体の参加もあった。

地域のお祭りとして浸透し、大人から子どもまで多くの方が参加し、地域交流を深める事ができた。今後もわんぱく公園で実施し、地域の方とつながる場にしていきたい。

#### 《ごはんプロジェクト》

- ・テーマ 『食』を通じた人とのつながり

プロジェクトのテーマである「食を通じた事業について検討」することを実施した。30 年度は「ばんごはん食べてけば？」の活性化と内容検討、アンケートの声を形にする「ごはんマップ」の作成、地域資源とのつながりを強化する「まじっちゃおう！」等の開催等に取り組んだ。

- ・ばんごはん食べてけば？ など

毎月第 2 木曜日 17 時から 20 時まで、参加費 300 円（小学生 100 円）で、誰でも参加自由の夕食会〈晩ごはん食べてけば？〉を開催した。

2018 年度は 2 回の未実施（北海道胆振東部地震、インフルエンザ流行による通所閉鎖のため）が

あったが、前年度の参加者月平均 47.6 名を上回り、月平均 53.3 名と毎回安定した参加者があった。

近隣住民に「おとなり割引券」を配布したこともあり、初めての参加者も多く見られた。今後も継続して地域への参加呼びかけを行い〈ばんごはん食べてけば?〉の活性化を目指したい。

さらに地域資源との交流を深める〈ご近所交流会 SCでまじっちゃおう!〉を実施。3 回目となった今年も多く参加があり「次年度以降も継続してほしい」という声を参加者から頂いた。

#### 2018 年度ばんごはん食べてけば?月別参加者数・メニュー

	大人	小学生	未就学	合計	メニュー
4月	42	4	5	51	ごはん P の中華メニュー
5月	44	9	9	62	カレーライス
6月	36	5	5	46	お知り協会の餃子
7月	50	12	9	71	流しソーメン
8月	35	6	6	47	あっさり温野菜・まぜご飯
9月					北海道胆振東部地震のため中止
10月	43	9	6	58	きのこカレー
11月	32	4	4	40	ハロウィンメニュー
12月					インフルエンザ流行のため中止
1月	36	10	8	54	ごはん P の餅つき
2月	39	9	7	55	ポトフ・唐揚げ
3月	35	8	6	49	春キャベツの回鍋肉
合計	392	76	65	533	月平均：53.3 名

#### SC でまじっちゃおう!

1 月 26 日 (土) 18 時 30 分~20 時 30 分で開催

参加者 78 名 (あむスタッフ 30 名、外部参加者 48 名)

#### ・「食」に関する地域マップの作成

地域マップ作成に向けた“つぶやき拾い”(ニーズ調査)のためのアンケートを実施

- ・〈ばんごはん食べてけば?〉の内容に関するアンケート
- ・普段の外食先、“あったら良いな、こんな店”に関するアンケート
- ・「ごはんマップ」作成の実施(平成 30 年度は 4 件の調査を実施)

#### 《わいわいサロン》

毎週火曜日 11 時から 14 時まで、あじ太郎生活応援団と協働し、南 9 条通サポートセンターを会場として、近隣に住む高齢者を対象に「おしゃべりの部屋—わいわい・サロン」(参加費 300 円軽食、飲

み物付)を開催した。

毎回8~10名程度、近所に住む70~80代のお年寄りが参加し、おしゃべりやゲームをして過ごしている。「いつも一人でご飯を食べているので、みんなと一緒にだと楽しい」という声が聞かれるなど、日中一人になりがちなお年寄りに仲間づくり、交流の場を提供することができた。

月別参加者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
38	48	33	41	21	35	54	37	42	35	36	34	454

5月14日 宮の森病院主催バス旅行(小樽)

9月25日 夜のわいわいサロン

12月11日 忘年会

### 3. 子育て支援事業

#### 《ころころひろば》

毎週水曜日午前10時から11時30分まで、〈に・こ・ば〉を会場として、集団での活動が苦手な子どもでも安心して参加できるよう、少人数規模の子育てサロンとして活動している。

2017年5月、にこばが引っ越したことにより、2018年度前半は参加者が少ないまま経過していた(1~3組/回)が、年度後半から区保健センターからの紹介や口コミなどにより、参加者数が増加しつつある(5組以上/回)。

参加者の年齢層は前年度にひきつづき、1歳前後の子が多い。母親同士のつながりができることで、情報交換の場にもなっていた。

他の子育てサロンと違い、小規模なため「ころころひろばは乳児が安心して集まれる場所」という母親たちからの声を聞くことができた。

スペースに限りがある中、「乳児~歩きはじめの子が安心して遊べる空間」がころころひろばのアピールポイントであることを認識することができた。

#### 過去3年度におけるころころひろば参加者の推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2016年度	18	15	25	19	24	24	15	22	15	9	19	21	226
2017年度	9	7	2	2	8	11	8	17	3	5	10	9	91
2018年度	7	12	9	15	9	10	20	11	23	24	26	29	195

#### 《リトミック教室》

親子で参加し、音楽に合わせたリズム遊び、楽器遊びなどを行うリトミック教室を通年開催した。

継続することで、ステップアップした内容ができ、それぞれの子たちの成長がみられた。  
最終回に写真付きのお礼カードをお渡しし、良いしめくりをすることができた。

期間・回数：6月～3月 毎月第3火曜日（計 10 回開催）

会場 あげぼのアート&コミュニティセンター

講師 高橋幹子さん

全登録者：13 組（通年参加者：6 組 中途参加者：7 組）

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
6	8	8	6	6	7	6	3	7	10	67

#### 4. 障がい者支援事業

##### 《お知り合い協会》

主に知的な障がいのある当事者が集まり、交流する「お知り合い協会」の活動を支援した。世話人（当事者）の方々が主体となれるよう世話人会の運営を支えた他、交流会、イベントの開催、準備のサポートを行った。

2018 年度は世話人・スタッフ歓送迎会、『ばんごはん食べてけば?』も担当した。またなんきゅう夏まつりでは前年度、お知り協会単独でブース担当を担当し、大変だったという意見を踏まえて、あむのスタッフといっしょに遊びコーナーを担当して、体力、気力に配慮した充実した夏まつりとなった。

年明けには恒例となった、地域で暮らす障がいのある人たちに参加を呼びかけ、「お知り協会新年会」を企画し、例年通り大盛況の内に終えることができている。

5月10日 世話人・スタッフ歓送迎会

7月29日 なんきゅう夏まつりで遊びコーナーを担当

1月19日 新年会 32 名参加

#### 5. 夢の種を咲かす会

GAP 札幌ステラプレイス店に勤める松本氏よりいただいた 10,000 ドル（約 100 万円）の寄付を原資に、リンゴの木のオーナーになって、あむ利用者、スタッフ、GAP スタッフがみんなで収穫に行き、交流しようというイベント〈夢の種を咲かす会〉を開催した。

今年で4回目の実施となったが、今後も交流を深め継続して活動を行っていく為、企画内容の振り返りを行い、次年度以降の活動を検討していきたい。

- ・日時 10月13日（土）
- ・会場 余市町 さくらんぼ山
- ・参加者 61名

## 災害支援検討チーム なんきゅう となり組

なんきゅうとなり組は利用者やご家族、地域の方々、スタッフとその家族が安全に生活できるよう、災害発生時またその前後に想定される事態について、具体的にシミュレーションをしながら、法人全体で取り組むべき事や各事業所の対応等を整理してきた。また、各事業所で非常持ち出し品・備蓄品の備え、連絡体制の整備を行い、随時進捗を確認しながら、災害対策本部の設置と機能等についての検討を進めてきた。

### 1. 緊急連絡リストの作成と災害対策本部の整備

各事業所で緊急連絡リストの作成に取り組んでもらった。法人全体で利用者やご家族に連絡を取れる体制とスタッフ間の連携が取れる準備を進め、LINE ワークスの導入の検討に入った。

災害発生時の情報の集約、発信の機能を持つ災害対策本部の機能や立ち上げのタイミングなど、具体的に試案を出すまでに至らなかったが、法人全体の動きを検討してきた。

### 2. 法人全体の避難訓練

非常災害時の法人全体の動きを想定するために、全事業所参加型で、一斉の避難訓練をシミュレーションで実施した（6月11日18時から20時）。具体的に、通常の雨量、大雨警報及び豊平川氾濫注意水位、豊平川堤防決壊の3段階のレベルを想定し、時間経過とともに取るべき行動を考えた。各事業所の行動に加え、災害対策本部や事業所間の連携のあり方の課題が見えてきた。

9月6日に発生した北海道胆振東部地震を受け10月26日に全事業所で集まり、災害発生後からスタッフや事業所がどう動き、対応したかなどについて振り返り、今後の課題を共有した。

### 3. 町内会との協働の取り組みに向けて

上記を優先して行っていたため、年度当初計画した町内会の方々や災害対策について考える「非常食試食会」や「簡易トイレ等の非常災害グッズ体験会」等の企画を行うことはできなかった。

### 4. その他

ワン・オールで実施している「誰もが住みやすいあんしんのまちコーディネート事業」の協力を得る取り組みについて検討したが、具体的な実施は来年度以降に見送った。